（左）「周防大島郡遠崎浦山本屋船　広東漂流記」（三坂圭治文庫641）　（右）「周防国遠崎浦之者被放風渡唐ニ付、長崎御奉行所より此御方江御渡之次第」（毛利家文庫41公儀事4（18の5））

防長と海

その記録と記憶

3

流通と移動③

漂流記 2件

江戸時代、大坂～江戸間は船による物流の大動脈となりましたが、その航路、とりわけ熊野灘～遠州灘は漂流発生の危険地帯で、北西の季節風が敦賀湾から太平洋に吹き抜ける冬に多く発生しました。

商船として一般的だった弁財船（いわゆる北前船）の構造と航海技術も、鎖国の影響もあり、あくまでも内航用のものでしたから、漂流を増やす一因となっていました。当館にも数多くの漂流記があります（裏面参照）。その中から、周防長門の船の漂流記を2件紹介します。

【遠崎浦山本屋船の漂流】

上の左写真は元禄5年（1692）7月に発生した漂流の記録で、周防遠崎浦（現柳井市）の山本屋の船（船頭は八郎右衛門）が出羽の米を江戸に運んだ後、伊勢の大王崎で暴風に遭い、50日の漂流を経て中国華南の広東に漂着し、さらに2年近く中国の地を転々とした後、元禄7年の9月末に12人全員無事に故郷に帰還したときのものです。同時に同所から漂流した遠崎の助三郎船の乗組員も、八丈島に漂着の後、故郷に帰っています。

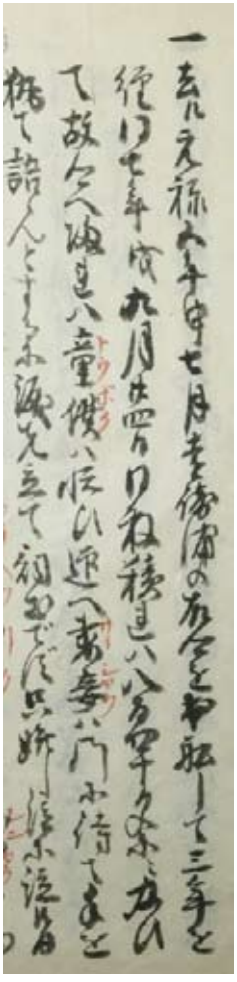
この漂流は、伊勢から北西風に流されて太平洋沖に出たのち、偏東風（貿易風）によって低緯度に運ばれ、さらに北赤道海流によって中国南部にたどりついたものとみられます。清国での扱いは友好的であったようです。

帰国した彼らは長崎奉行所で藩に引き渡され、藩の取り調べを受けました。そのときの記録も当館に残されています（上右写真）。

「童僕ハ悦ひ迎へ、妻妾ハ門に待て手を執て語らんとするに涙先立て詞出でず、只嬉し泣に泣ける・・・」

久しぶりに故郷に帰った乗組員たちと家族・村人たちとの再会の場面です。

【参考文献】
①吉積久年「周防遠崎浦船広東漂流記」（『海事史研究』54号）
②大畠町教育委員会『遠崎八郎右衛門記　付公儀事諸控』



「広東漂流記」　十二名が遠崎へ帰還した部分。本文参照

【藤曲浦浮木丸の漂流】

嘉永3年（1850）10月、長門藤曲浦（現宇部市）の「浮木丸」（船頭は棟助）乗員11名は江戸から陸奥奥州に向かう途中、下総の犬吠埼沖で暴風雨に遭い、1か月の漂流ののち無人島（島名不詳）にたどり着きました。彼らは鳥の肉や卵を食い、雨水を溜めて1年の無人島生活を耐え抜き、ブレーメン（ドイツ北部の都市）の船に救助されました。香港に運ばれた11名は、今度はイギリス軍艦で寧波に運ばれ、清国の役人に引き渡されました。清国での待遇は、一貫して丁重だったようです。

彼らが乍浦（さほ、上海の近く。日本人漂流者を送還する港）に運ばれたころ、清国では太平天国の乱が起きており、彼らは約1年をそこで過ごしますが、その間、船頭であった棟助とその父・与七が病死しました。

嘉永5年（1852）12月、9名は長崎に送還され、奉行所の取り調べの後、故郷に帰ることを許されました。9名の中には、陸奥や讃岐、能登や出雲の者もいました。

なお、彼らは取り調べの際、一貫して「唐の国の島」へ漂着し、「唐の船に助けられた」と供述しており、当館の漂流記（塩田家文書856「房州沖遭難より清国へ漂流の記」）もそのような内容になっています。これは偽証ですが、日本のキリシタン禁制に配慮し、無事に漂流民が帰還するための方便でした。

漂流地を偽証する例は多くあり、漂流者がキリスト教に入信していないかを取り調べる日本の役人側も、送還して謝礼を貰う清国の側も、その方が都合がよかったのです*。

したがって、この漂流記だけから彼らの足取りをたどることは困難ですが、この漂流を研究した全国各地の研究者（多くは乗組員の故郷の研究者）により、以上のことが明らかとなりました。

宇部市上条の西宮八幡宮には、乍浦で病死した与七が生前の天保5年（1834）に寄進したとされる狛犬が残されています（写真）。

*帰国時の取り調べの際、長崎奉行が萩藩に人物照会を行った記録が当館毛利家文庫32部寄1「諸記録綴込」（24の2）にあります。

【参考文献】
①小林郁『嘉永無人島漂流記』（三一書房）
②同「藤曲村棟助船浮木丸の城米船としての活動、及び漂流の顛末について」（「宇部地方史研究」26号）

【山口県文書館所蔵の漂流記】（朝鮮への漂流および日本への漂着を除く。★は本文に記載）

ID	タイトル（漂流先）	文書館請求番号	帰国年
1	漂流記（口書、韃靼）	毛利家文庫29風説30「秘書」	1646
2	★周防大島郡遠崎浦山本屋船　広東漂流記（清国）	三坂圭治文庫641	1694
3	漂民御覧之記（大黒屋光太夫、ロシア）	田辺竹次郎収集史料117 徳山毛利家文庫 条約24	1792
4	安南国え漂流仕候陸奥国之者九人口書（ベトナム）	一般郷土史料1174	1795
5	無人島漂流帰国迄始終記（日記、鳥島）	徳山毛利家文庫 異国船漂着29	1797
6	魯西亜国ヱ漂流異国之記（調書、ロシア）	毛利家文庫29風説30「秘書」	1804
7	尾州重吉漂流記（アラスカ）	毛利家文庫29風説30「秘書」	1816
8	漂流聞書　伊勢次郎船拾九人乗（バタン）	右田毛利家文書1442	1831
9	土佐漁夫漂流記（ジョン万次郎、アメリカ）	毛利家文庫29風説30「秘書」	1851
10	土州人漂流記（ジョン万次郎、アメリカ）	毛利家文庫29風説43「雑書」	1851
11	★房州沖遭難より清国へ漂流の記（清国）	塩田家文書856	1852

「房州沖遭難より清国へ漂流の記」
漂流が始まった部分。

宇部市上条の西宮八幡宮の狛犬
台座の後ろ側に「天保五年六月吉日　三嶋屋　与七」とあります。尾道の宗八という石工の作です。